【9】『陸奥津軽深浦地方沿革志』

写1冊（47―2）

〔書名よみ〕むつつがるふかうらちほうえんかくし

〔著編者〕海浦義観　〔写刊年次〕明治年間（明治三十一年か）

〔外題〕陸奥津軽深浦地方沿革志

〔内題〕陸奥津軽深浦地方沿革志

〔その他題〕〈序〉深浦沿革誌　〈尾〉深浦地方沿革志

〔残欠状況〕全　〔保存状況〕小破　〔装訂〕袋綴　〔紙数〕三〇丁

〔本文用字〕漢字・平仮名　〔一面行数〕一〇行　〔界線〕ナシ

〔表紙〕本文共紙　〔法量〕縦二五・〇糎×横一七・八糎　〔料紙〕楮紙（杉原）　〔書入〕注記（墨）　〔表紙書入〕ナシ　〔印記〕ナシ

〔備考〕二七丁目内側に別文書あり。「無為額箱裏書」文化三丙寅年九月、深浦町11、和嶋丈右衛門、平井八右衛門

〔奥書〕ナシ

〔解題〕

『陸奥津軽深浦地方沿革誌』の内容を手書きで筆写したもの。『深浦地方沿革志』（47―1）との違いは、こちらには陸羯南と外崎覚の「序」があることである。また、書き入れの箇所も異なる。以下に陸と外崎の序文を掲げる。

深浦沿革誌序

阿倍比羅夫舟師を率ゐて蝦夷を征すと云ふは斉明天皇の正史に見ゆ比羅夫何処の港より発せしや詳かならすと雖越の国の守将たりしかば敦賀又は伏木などよりせしなるへし陸奥国深浦に日和見山と云ふあり往古は後方羊蹄見山と称し比羅夫東征の時舟師を深浦に停め蝦夷を望みし所なりと伝ふ或は然らん深浦は陸奥国西岸唯一の港湾にして古来上国より蝦夷に往く者舟を此処に繋かさるは莫し北渡帆船の順風を俟つ此地実に停繋の良港たり旧藩時代に至るまて一の小繁華を成せしは其故なきにあらす予幼時一たひ其地を踏み言語風俗自ら藩地の中に特色を備ふるを見て当時頗る奇異の感を作し今に至る猶ほ記臆に存す其後広く諸地方に遊ひ三越賀能若丹伯雲諸州の風俗言語往々にして吾か深浦の之に近き者あるを見るや本と海路交通の然らしむる所にして復た甚た怪むに足らさるを知る夫れ奥羽の文化は大凡二道より来るものたり太平洋に沿ひて来るものは武家の文化にして江戸時代の勢力を感受したるなり而して日本海に沿ふ所の海岸は奈良京都より北国を経て来る王朝の文化に浴したるもの多し今の陸奥国は東西北三面海洋を受け其西岸は古より夙に王朝の文化に感し深浦の如きは其最も著きものなり海浦義観は深浦の旧家なり其弟篤弥は予と交ること旧し今現に朝鮮京城に在り頃者義観其著す所の深浦沿革誌を寄せて予の一読を促す比羅夫の遺蹟より以て古刹円覚寺の縁起に至るまで其要を摘載せり皆な千有余年前の史料たるに近し一小冊子と雖梓して以て世に行はゞ亦考古家の参考たらん今や鉄路貫通一昼夜以て弘前に達すへし工事進行せば所謂る古の停代に至る亦此より数時間を費やせば足る深浦は停代を距る僅かに二日程のみ考古家往きて千年前の遺蹟古刹を見るは遠きにあらさるへし

明治戊戌季夏　羯南東京下谷の僑居に於て誌す

深浦沿革誌序

我か津軽の地奥州の一方に僻在するを以て其旧跡勝地世人の知る処とならざる事久し啻に其旧跡勝地人に知れざるのみならず賢君名士の偉業卓

行も広く士林に伝播せざる者多し余常に之を憾む聊か其伝を叙して世間に発揚せん事を努めたるも駑才其志に酬ゆる能はす慙靦措くを知らず

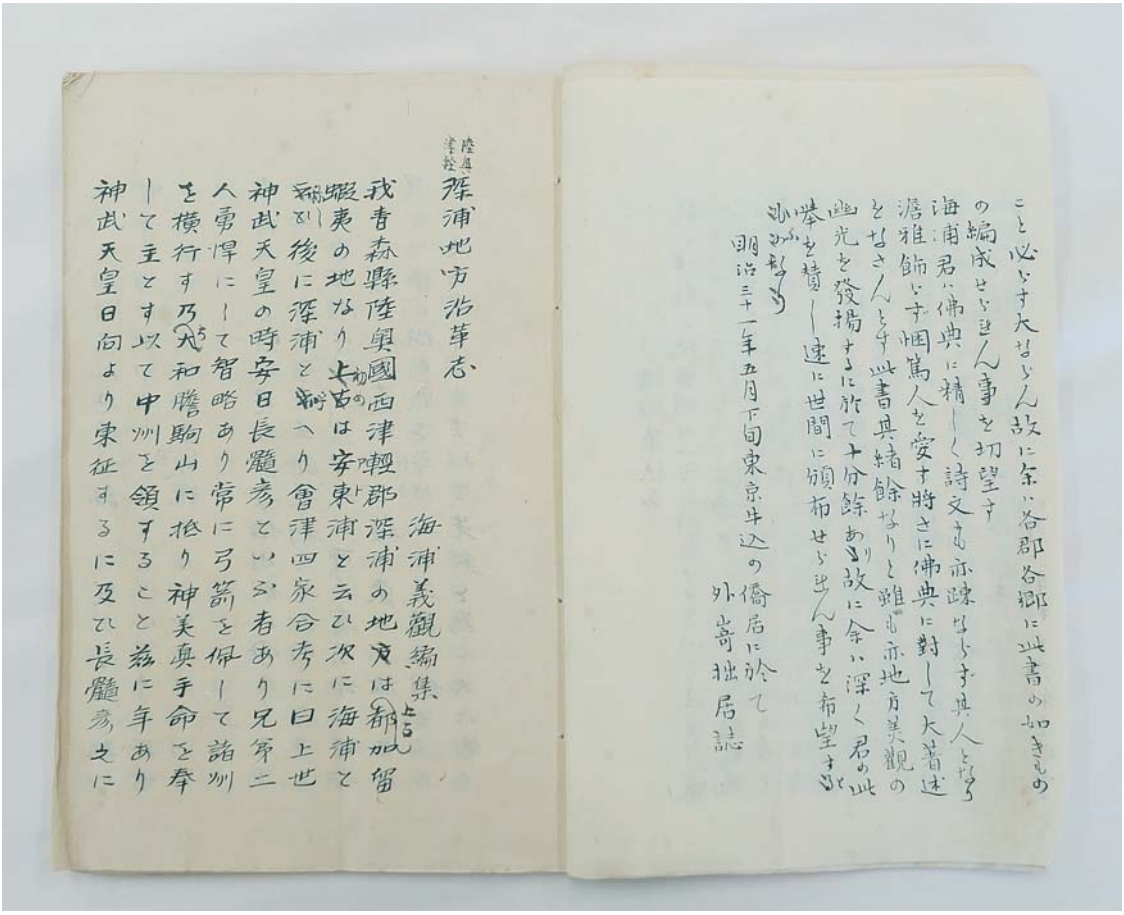
頃者学友海浦君義観深浦沿革志の著あり余は其地方の遺蹟沿革を示すの懇切なるに感じ慫慂して之を梓行せしむ蓋し歴史地誌等此種の如き資料に依りて編成せられない従前未た発見せざるの新事実を得るもの多くして此学に特種の光彩を与ふること必らす大ならん故に余は各郡各郷に此書の如きものの編成せられん事を切望す

海浦君は仏典に精しく詩文にも亦疎ならず其人となり一雅飾らず悃篤人を愛す将さに仏典に対して大著述をなさんとす此書其緒余なりと雖も亦地方美観の幽光を発揚するに於て十分余あり故に余は深く君の此挙を賛し速に世間に頒布せられん事を希望すといふ

明治三十一年五月下旬東京牛込の僑居に於て

外崎拙居誌

（尾崎　名津子）



陸奥深浦地方沿革志

海浦義観編集

我青森縣陸奥國西津軽郡深浦の地文は都加留蝦夷の地なり上古は安東浦と云ひ次に海浦と稱し後に深浦と稱へり會津四家合考に曰上世神武天皇の時安日長髓彦といふ者あり兄弟二人勇悍にして智略あり常に弓箭を佩して諸州を横行す乃大和膳駒山に拠り神美真手命を奉して主とす以て中州を領すること茲に年あり神武天皇日向より東征するに及ひ長髓彦之に

こと必らす大ならん故に余は各郡各郷に此書の如きものの編成せられん事を切望す

海浦君は仏典に精しく詩文も亦疎ならず其人となり雅飾らず悃篤人を愛す将さに仏典に対して大著述をなさんとす此書其緒余なりと雖も亦地方美観の幽光を発揚するに於て十分余あり故に余は深く君の此挙を賛し速に世間に頒布せられん事を希望すといふ

明治三十一年五月下旬東京牛込の僑居に於て

外崎拙居誌